丹後の国の成合のこと

今は昔、丹後の国は北国にて、雪深く、風けはしく侍る山寺に、観音験じ給ふ。そこに貧しき修行者籠りにけり。冬のことにて、高き山なれば、雪いと深し。これにより、おぼろけならずは人通ふべからず。この法師、糧絶えて日ごろ経るままに、食ふべき物なし。雪消えたらばこそ出でて乞食をもせめ、人を知りたらばこそ「訪へ。」とも言はめ、雪の中なれば、木草の葉だに食ふべき物もなし。五、六日請ひ念ずれば、十日ばかりになりにければ、力もなく、起き上がるべき心地もせず。寺の辰巳の隅に破れたる蓑うち敷きて、木もえ拾はねば、火もえ焚かず、寺は荒れたれば、風もたまらず、雪も障らず、いとわりなきに、つくづくと臥せり。物のみ欲しくて、経も読まれず、念仏だにせられず。ただ今を念じて、「今しばしありて、物は出で来なん、人は訪ひてん。」と思はばこそあらめ、心細きこと限りなし。今は死ぬるを限りにて、心細きままに、「この寺の観音、頼みてこそは、かかる雪の下、山の中にも臥せれ、ただひとたび声を高くして『南無観音。』と申すに、もろもろの願ひみな満ちぬることなり。年ごろ仏を頼み奉りて、この身いと悲し。日ごろ観音に心ざしを一つにして頼み奉るしるしに、今は死に侍りなんず。同じき死にを、仏を頼み奉りたらんばかりには、終はりをもたしかに乱れずとりもやするとて、この世には、今さらにはかばかしきことあらじとは思ひながら、かくし歩き侍り。などか助け給はざらん。高き位を求め、重き宝を求めばこそあらめ、ただ今日食べて、命生くばかりの物を求べて賜べ。」と申すほどに、戌亥の隅の荒れたるに、狼に追はれたる鹿入り来て、倒れて死ぬ。

ここにこの法師、「観音の賜びたるなんめり。」と、「食ひやせまし。」と思へども、「年ごろ仏を頼みて行ふこと、やうやう年積もりにたり。いかでかこれをにはかに食はん。聞けば、生き物みな前の世の父母なり。われ物欲しといひながら、親の肉を屠りて食らはん。物の肉を食ふ人は、仏の種を絶ちて、地獄に入る道なり。よろづの鳥獣も、見ては逃げ走り、怖ぢ騒ぐ。菩薩も遠ざかり給ふべし。」と思へども、この世の人の悲しきことは、のちの罪もおぼえず、ただ今生きたるほどの堪へがたさに堪へかねて、刀を抜きて、左右の股の肉を切り取りて、鍋に入れて煮食ひつ。その味はひの甘きこと限りなし。

さて、物の欲しさも失せぬ。力もつきて人心地おぼゆ。「あさましきわざをもしつるかな。」と思ひて、泣く泣くゐたるほどに、人々あまた来る音す。聞けば、「この寺に籠りたりし聖はいかになり給ひにけん。人通ひたる跡もなし。参り物もあらじ。人気なきは、もし死に給ひに

けるか。」と、口々に言ふ音す。「この肉を食ひたる跡をいかでひき隠さん。」など思へど、すべき方なし。「まだ食ひ残して鍋にあるも見苦し。」など思ふほどに、人々入り来ぬ。

「いかにしてか日ごろおはしつる。」など、廻りを見れば、鍋に檜の切れを入れて煮食ひたり。「これは、食ひ物なしといひながら、木をいかなる人か食ふ。」と言ひて、いみじくあはれがるに、人々仏を見奉れば、左右の股を新しく彫り取りたり。「これは、この聖の食ひたるなり。」とて、「いとあさましきわざし給へる聖かな。同じ木を切り食ふものならば、柱をも割り食ひてんものを。など仏を損なひ給ひけん。」と言ふ。驚きて、この聖見奉れば、人々言ふがごとし。「さは、ありつる鹿は仏の験じ給へるにこそありけれ。」と思ひて、ありつるやうを人々に語れば、あはれがり悲しみあひたりけるほどに、法師、泣く泣く仏の御前に参りて申す。「もし仏のし給へることならば、もとのやうにならせ給ひね。」とかへすがへす申しければ、人々見る前に、もとのやうになり満ちにけり。

されば、この寺をば成合と申し侍るなり。観音の御しるし、これのみにおはしまさず。

【口語訳】

今となっては昔のことだが、丹後の国は北国であり、雪が深く、風が激しゅうございます山寺に、観音が霊験を現しなさる。そこに貧しい修行者が籠っていた。冬のことであり、高い山であるので、雪がたいそう深い。これにより、特別な場合でなければ人が行き来することができない。この法師は、食糧が絶えて数日が経ったまま、食うことができる物がない。雪が消えたならば（山を）出て托鉢をもすればよいが、（また）人を知っているならば「訪れよ。」とも言えばよいが、雪の中であるので、草木の葉でさえ食うことができる物もない。五、六日仏に願いをかなえてくれるよう祈念していると、十日ほどになったので、力もなく、起き上がろうとする気にもならない。寺の東南の隅に破れている蓑を敷いて、木も拾うことができないので、火も焚くことができず、寺は荒れているので、風も止まらず（吹き抜けて）、雪もさえぎられず（吹きつけ）、たいそうつらいので、ぐったりと横になっている。食べ物ばかりが欲しくて、経も読むことができず、念仏さえもすることができない。ただ今（だけ）を我慢して、「もうしばらくして、食べ物はきっと手に入るだろう、人はきっと訪ねて来るだろう。」と思うならばそれはよいだろうが（そうも思えず）、心細いことはこの上ない。今はもう死ぬ間際の状態で、心細いので、「この寺の観音よ、（あなた様を）頼りにして（いるから）こそ、このような雪の下や、山の中にも隠れ住んでいますが、（本来なら）ただ一度声を大きくして『南無観音。』と申し上げると、すべての願いはみなかなってしまうことです。長年の間仏を頼りにし申し上げて、（死に直面した）この身の上（であること）がたいそう悲しいです。日ごろから観音に思いを一つにして頼りにし申し上げる御利益によって、今はもう死ぬのでしょう。同じ死に（対して）、仏を頼りにし申し上げているような程度には、臨終を心確かに乱れず迎えるのではないかということで、この世では、今となっては際立ったことはないだろうとは思いますが、このように（修行を）してあちこちを歩き回っています。（それなのに仏は）どうして助けてくださらないのでしょうか。もし高い位を求め、貴重な宝を求めるならば（応えてくださらなくても）よいでしょうが、ただ今日食べて、生きのびるだけの食べ物を探して（私に）お与えください。」と申し上げる時に、北西の隅の荒れている所に、狼に追われた鹿が入って来て、倒れて死ぬ。

そこでこの法師は、「観音がお与えになったものであるようだ。」と、「食うことにしようか（どうしようか）。」と思うが、「何年もの間仏を頼りにして仏道修行をすることは、しだいに年が積もり重なった。どうしてこれを急に食らってよいだろうか（、いや、よくない）。聞く（ところによる）と、生き物はみな前世の父や母である。私は食べ物が欲しいというものの、親の肉を屠って食らってよいだろうか。生き物の肉を食う人は、（成仏するための根本となる）仏の種を絶って、地獄に入る道である。さまざまな鳥や獣も、（そういう人を）見ては逃げて走り、怖がり騒ぐ。菩薩も遠ざかりなさるだろう。」と思うが、この世の人の悲しいことは、死後の罪も思われず、今現在生きている時の（飢えの）堪えがたさに堪えかねて、刀を抜いて、左右の股の肉を切り取って、鍋に入れて煮て食ってしまった。その味わいのうまいことはこの上もない。

そうして、食べ物の欲しさもなくなった。力もついて人間らしい正しい心（を取り戻したこと）を感じる。「嘆かわしいことをしたなあ。」と思って、泣く泣く（そこに）いる時に、人々が大勢来る音がする。聞くと、「この寺に籠っていた聖はどのようになりなさっただろうか。人が通った跡もない。召しあがる食べ物もないだろう。人の気配がないのは、もしかすると死になさったのか。」と、口々に言う声がする。（法師は、）「この肉を食った跡をなんとかして隠そう。」などと思うが、どうしようもない。「まだ食い残して（肉が）鍋にあるのも見苦しい。」などと思ううちに、人々が入って来た。

「どのようにして何日もの間をお過ごしになったのか。」などと（言って）、周りを見ると、鍋に檜の切れ端を入れて煮て食ってある。「これは、食い物がないとはいうものの、木をどのような人が食うのか。」と言って、たいそう気の毒がるが、人々が仏を見申し上げると、左右の股を生々しく彫り取ってある。「これは、この聖が食ったのだ。」と言って、「たいそう嘆かわしいことをしなさった聖だなあ。同じ木を切って食うものであるならば、柱を割って食うとよいのに。どうして仏を傷つけなさったのだろうか。」と言う。驚いて、この聖が（仏像を）見申し上げると、どうやら人々が言う通りである。「それでは、先ほどの鹿は仏が霊験を現しなさったのであるのだなあ。」と思って、先ほどの様子を人々に語ると、（観音の霊験に）感動し（自分の身を与えた観音を）いたわしく思いあっていた時に、法師は、泣く泣く仏の御前に参上して申し上げる。「もしも仏がなさったことであるならば、もとの姿におなりになってください。」と繰り返し申し上げたところ、人々が見る前で、すっかりもとの姿になった。

それだから、この寺を成合と申すのです。観音の御霊験は、これだけではおありにならない。